



令和3年度第3学期始業式式辞

2021.1.7「令和3年度 第3学期始業式式辞」

令和3年度第3学期始業式は新型コロナウイルス感染症要望対策のために放送にて行いました。

令和3年度第3学期始業式式辞：『 You can do it, tiger. 』

皆さん、あけましておめでとうございます。新型コロナウイルス感染予防対策のために今回も放送でお話しをします。少しの間、耳を傾けてくれたらうれしいです。

年末、昨年の大河ドラマの総集編を見ていた時に気になった言葉がありましたので、今日はその言葉について紹介したいと思います。その言葉とは、主人公渋沢栄一が主君の命によりフランス、パリ万国博覧会に出かけることになり主君である徳川慶喜に謁見し、別れのシーンで述べられたものです。慶喜公は「望まぬ將軍職についてしまった」とつぶやきます。それを聞いた渋沢栄一は、次の言葉を慶喜公にエールとして送ります。その言葉を聞いた慶喜公も途中から一緒になってその言葉を暗唱した言葉です。

**人の一生は重荷を負って遠き道を行くがごとし。急ぐべからず。
不自由を常と思えば不足なし。ここに望みおこらば困窮したる時を思い出すべし。
堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思え。
勝つ事ばかり知りて、負くること知らざれば害その身にいたる。
おのれを責めて人をせむるな。
及ばざるは過ぎたるよりまされり。**

この言葉は、徳川家康の遺訓、すなわち家康が残した言葉です。

この言葉の意味を現代風に解釈してみましょう。

**人の一生というものは、重い荷を背負って遠い道を行くようなものだ。急いではいけない。
不自由が当たり前と思えば、不満を覚えることもない。
心に欲が起きたときには、苦しかった時を思い出すことだ。
がまんすることが無事に長く安らかでいられる基礎で、「怒り」は敵と思いなさい。
勝つことばかり知って、負けを知らないことは危険である。
自分の行動について反省し、人の責任を攻めてはいけない。
足りないほうが、やり過ぎてしまっているよりは優れている。**

いかがですか。家康の遺訓にはいろいろな教訓がちりばめられています。中でも「**不自由を常と思えば不足なし**」という言葉は今このコロナ禍に置き換えて考えてみましょう。何事もコロナ前に戻すことを前提としまうと、「その場のしごき」の中途半端なものになりかねません。「不自由が当たり前と思えば」ならどうでしょう。現在置かれている状況が当たり前なのだと考えれば、「コロナ前はこうだった」という呪縛にも似た考えから解放されて、「今の状況でできることは何か」と考えられるようになるはずです。400年以上も前の家康の言葉から、**状況に応じて気持ちを切り替えて、前を向いて歩いていかなければならない**ことを教えてくれているような気がします。

また、家康は戦国時代の中で少しでも気を抜くと滅ぼされてしまうという危機感さえ、自らを奮立たせる原動力にしていました。実際に、家康は武田信玄という強敵が近くにいることを不幸ととらえず、「油断なく自分を励ます幸運だ」ととらえていたようです。「**及ばざるは過ぎたるよりまされり**」という言葉の根底にあるものは、自分自身に足りていないものは何かを常に分析し、自分や徳川家を強くするために、謙虚に学び続けていたようです。「**足りていない**」と思うことで、**もっと成長しなければならないというモチベーションが生まれ、常に緊張感をもって様々なことに取り組めると思っていたのかもしれない**。

人は、少しでもできるようになると驕り、油断してしまうこともあります。そうならないためには、現状に満足することなく自らを高めようとするモチベーションを高く持ち、さらに上を目指す気持ちが大切だと思います。「及ばざるは過ぎたるよりまされり」は、そのようなことを忘れてはいけないと教えてくれているような気がします。

新しい年を迎え、皆さんは新たな目標を立ててくれていることと思います。その目標の実現に向けて「自分は、まだまだだな。自分にはこれが足りていないな」と思い、学び続けてください。君たちの成長に期待しています。

最後に、今年の干支にちなんで英語の言葉をおくります。

You can do it, tiger. 「きみたちなら、あなたならできるよ。」